

2022年 鐘韻

「Do not lose your decency」

この3年間のコロナ禍でできないことが数多くあるが、当科の得意分野、伝統芸能であった大宴会もその一つである。そして、その後の大大カラオケ大会。いまでは懐かしいものである。昨年11月の出島メッセ開業直後に第13回日本 Acute Care Surgery 学会を開催することができ、また本年9月の西九州新幹線開業直後にはまた出島メッセで第47回日本大腸肛門病学会九州地方会・第38回九州ストーマリハビリ研究会を開催することとなり、少しなりとも長崎の活性化に寄与することができたかと、ほくそ笑んでいる。幸い当時コロナ感染の下り坂にあたり、役員懇親会も料亭にて病院規定を守り開催することもできた。(前室にて挨拶・写真撮影まで行い、食事は全室完全個室4人ずつ!)。伊藤信一郎准教授が大車輪の活躍をしてくれたことに心より感謝している。LA時代の恩師に Lucky Surgeon, Good Surgeon. と教えてもらったままを感じている。

2012年元旦付けで当科教授を拝命し丸10年経過し、全速力で走ってきた。その内容については伊藤信一郎准教授を中心に松島肇助教、草野舞子秘書、柴田知佳秘書、村井友美研究員が編集してくれた Quinquennial Report II (2017.1-2021.12)に譲るが、何とか知恵を絞り外科学研究を進め、手術・外来も頑張り、学生教育にも力を入れたつもりである。同門会の先輩方の無償の愛にはいつも感謝の念のみで御礼のしようもない。今後も教室から外科学の発信をすること、長崎県・長崎市の地域医療貢献に全力を尽くすことで恩返ししたいと考えている。

本年(2022-23年)の教室の大きな成果として、下の4つを挙げたい。

1. 9人の元気な新入局員が入局してくれた。例年2-3人の入局者にとどまっていたが、教室員の皆さんの熱心な教育姿勢と大らかな雰囲気とで久々の大量入局である。外科医を目指してくれた金の卵達は皆でしっかり育てて、いろいろなことを経験してもらい、大きく羽ばたいてほしい。その一環として新入局の先生方には early exposure の意味で秋の ACS や冬の ASCO-GI に同行させ、世界標準のアカデミックサーજャンを直接見て、肌で感じてもらうように努めている。

2. テルモさんとの再生医療共同研究講座「消化器再生医療学」による世界初の腹腔内消化器再生医療治験開始した。自己筋芽細胞を患者大腿より3週前に採取しテルモさんにて培養・シート化、十二指腸早期がん ESD 直後に腹腔鏡下に自己筋が細胞シートを十二指腸漿膜側に移植・貼付した。治癒促進、穿孔予防効果は論文に譲るが、2022年11月の時点で2例のエントリーを得て進行中である。コロナ禍で治験エントリーの遅延が生じたが、AMED

の支援を得て金高教授を中心に治験の予定を全うしてほしい。

3. 10月1日に京都のSCREEN株式会社と教室二つ目の共同研究講座を開講した。曾山明彦君が准教授として着任し、肝移植のための臓器灌流装置の開発に取り組んでいる。印刷のための版の製造を祖業とされるSCREENホールディングスの微小循環管理や微小実験器具の技術が、移植臓器の阻血時間延長のための国産臓器灌流装置の上市までこぎつけてくれることを大いに期待している。株主総会が終了した11月1日にオンライン記者会見すると、早速日経新聞らに大きく取り上げて頂いた。詳細は曾山准教授の稿に譲りたい。

4. AMEDの外部資金を得て、9月より低分子化合物による肝前駆細胞(CLiP)を用いた肝硬変治療の前臨床研究を開始した。前年AMEDの臨床研究枠にチャレンジしたが落選したため、二次募集に全力を注いだ結果、リベンジ採択を頂いた。2年半の資金であり、次のタームには是非臨床紅葉できるようにPMDA等の手続きを進める所存である。

その他も、教室員の皆さんは力を合わせて臨床・研究・教育・地域貢献、国際貢献によく頑張った。また関連病院の先生方もコロナ禍でご苦労されたが、何とか踏みとどまっておられ、心よりの敬意を表したい。今エッセイのタイトルの「Do not lose your decency.」はオランダ時代の恩師が、人生いろいろなことがあるが「人間としての上品さを忘れるな」と教えて下さった言葉である。ヨーロッパ人独特の感覚で、大好きな言葉である。上手いかわないこと、嫌になる事もたくさんあるが、先の言葉を胸に刻んで教室員と共に職責を全うしたい。

コロナ闘病記

2022年8月初めとうとう新型コロナウイルスに感染した。今までに計30回ほどPCR検査を受けてきたが全く陽性もせず、何となく私には縁のない病気かと考えていた。ある日、午後から悪寒、全身倦怠感があり、前週末に4回目のワクチンを接種したことから、また副反応かと考え様子を見ていた。しかし39度近くまでの発熱を認めNSADISの内服を余儀なくされたため検査したところPCR陽性であった。確定診断までの間はカンファレンスも用心してオンライン参加に切り替えていたため、濃厚接触者もなく安堵した。家内は私より2日遅れで咳、咽頭痛を発症しみなし陽性となり、発熱もあり結構つらそうだった。長女はちょうど旅行に行っていたため帰宅せずそのままホテル暮らしをお願いした。長男は相変わらず海外留学中のため、家内と二人自宅療養に入った。その経過を記載する。

オミクロン株となり風邪レベルの病気と聴いていたが、私の場合は実際は異なっていた。一言でいうと症状がインフルエンザ並みのヘビーさで、タミフル・リレンザなどの特効薬がない。つまり自分の免疫だけで対処している感覚であった。ぐったりと休んでおくしかないというのが50代半ばの罹患者としての感想である。とはいえ、当初悩まされていた発熱、咽頭痛は発症日から4日後より次第に軽快していき、6日目にはほぼ通常通りの体調に戻っ

た。4日目には東京での市民公開シンポジウムに参加予定であったが、オンライン参加に切り替え、司会の役目は恙なく務めることもできた。その後はさらに徐々に体調も改善していったが、苦痛であったのは自宅から出れない事である。食料は家内がインターネットでスーパーから購入し、あまり問題にはならなかった。食事も最初の2日間はUber Eatsを用い出前を取ったが、次第に飽きてきた。その後も秘書の草野君に頼んで面会・会議をすべてオンラインに切り替えたが、私の仕事は手術・外来以外は実はオンラインで可能であるということがわかった。逆に言うと外科医はオンラインでは替えが効かないということも実感した。

コロナ禍でよく耳にする話ではあるが、5日目から料理にチャレンジした包丁は中学校の家庭科授業以来であったため扱いが怖かった。家内にいつもメスを使っている人と笑われたが、メスではみじん切りの様に自分の指に近づかない。ネットでレシピを確認しながら行くと美味しく出来上がり、料理というのは裏切らないようである。ただ手際が悪く、凄いい手際の良さの家内の偉大さを再確認した。

英会話の浮き沈み

私の祖父はデンマークの大北電信の社員であった。戦後は長崎市役所で市長の英語通訳を務め、最後は長崎海星高校の英語教員をしていた。私が小学校まで住んでいた蜷茶屋近くに住んでいたMr.ロビンソンと交友し、子供ながら英語を身近に感じていた。

小学校時代は新大工の長崎玉屋で土曜日に開催されていた英語劇教室ラボに通い、小学の時ミネソタのロチェスター郊外Dodge Centerにホームステイした。Mr. Schwenkeという祖父に言わせると東欧系の家族で私のホストはロンという少年だった。毎朝同じシリアルを食べ、たまにシリアルをシロップで固めたお菓子を作ってくれたのがすごくおいしかったのを覚えている。現地の少年野球にも参加しサヨナラヒットを打って“Good Hit”とチームメイトに褒められたのを覚えている。毎年、クリスマスカードなどが送られてきていたが、ずいぶん経ってからロンの妹のネッティーからロンが無くなったと連絡があった。

そのような縁で英語と関わってきて、外科に入局してからもいつかは海外で生活し、仕事をしてみたい希望を持っていた。今のように留学制度、奨学金制度も恵まれておらず、自費で留学した。1年目は英語にフォローするのがやっと、2年目に何とか耳に入ってくるようになり、3年目には言いたいことが言えるようになった。帰国してからは必要時のみに英語を使う頻度が減り、せつかくの技量が寂れていった。その後、オランダ留学しすぐに英語は復活し、十分に議論、手術中のやり取りもできた。また日本に17年定住しているがそのうちに英語がどんどん下手になっていった。教室に留学生が来た際には英語で会話するし、海外で手術指導や学会出張する際は英語でやり過ごせるのだが、英語が劣化しているのを自覚していた。

ところが最近、英語力が復活している。理由はコロナ禍、NetflixやAmazon prime videoのお陰である。手っ取り早い外国語の学習法は現地の方が使っている「生の言葉」を真似す

ることである。コロナ禍で家内と Netflix 番組を視聴することで生の英語がどんどん入ってくる。また、英語以外の言語の番組も簡単に英語に変換し、例えば韓国・ドイツの番組も英語で視聴することができ大変便利だ。

転居と揺らぎ 1/f

2022年1月に16年間お世話になった泉町（住吉の上の方）から、元船町のマンションに転居した。子供たちが付属小中にお世話になり、時津の私立高校に通っていたため、都合が良かった。ただ二人とも将来の目途が立ってきたため、住宅ローンぎりぎりのタイミングで転居することとした。家内の終の棲家を確保するための意味もある。16年お世話になったマンションは泉町公園に面し、毎年の桜がとても綺麗で癒されていたが、今回の住居は長崎湾に面している。夜にウォーキングで長崎湾から浦上川に沿ってのコースをたどることが多い。今までは全く接点がなかった水・波を観ながら歩くことが増えた。桜もよかったが、水や波も眺めると心が休まる。そんな時、帰国していた長男が「1/fの揺らぎ」のことを話してくれた。自然界の1/f揺らぎは五感を通して人間の生体リズムと共鳴し、心地よさを感じるらしい。波の音、小川のせせらぎ、視覚的には木の木目やろうそくの炎など。1/f音を聴くと脳内α波の状態になり、ヒーリング効果がある。知らなかったが、心に響く歌手は独特の周波数を持っているらしく、例えば美空ひばり、宇多田ヒカル、ジャスティン・ビーバーなどがその例のよう。確かに耳に入りやすく、心地よいのである。おそらく最近の私のウォーキングもそのような環境で続き、去年の鐘韻にも記載した DMN 効果もあるようで続けている。

大北電信会社（グレート・ノーザン・テレグラフ GN）

先に記載したように私の祖父は晩年、長崎市長の通訳や海星高校の英語教師をしていたが、現役の頃はバリバリの電信士であった。大北電信会社（GN）に勤務しており、会社は現在のみなとメディカルセンターの近くにあった。友人や同僚には外人さんも多く、当時の写真を観ると写真の皆さんで雲仙のテニスコートに行ってテニスを楽しんだり、上海などに出張し仕事をしていた様子を伺い知ることができる。

そのような折、長崎新聞新書「大北電信の若き通信士 -フレデリック・コルヴィの長崎滞在記」という本に出合った。これは教室の濱田 隆志君がデンマーク コペンハーゲン王立病院に留学するため、長崎とデンマークの関係を何となく調べていた最中に、偶然目に留まり購入した。なんと時を超え祖父が務めていた GN デンマーク人が執筆された本を落手したのである。中には長崎に滞留したデンマーク人電信士からみた、明治の極東異文化、若い感性でとらえた日本、長崎が生き活きと描かれており大変興味深かった。GNはコペンハーゲンからロシア ウラジオストック、上海経由で海底ケーブルで長崎と繋ぎ、国内の電信網に接続したとのこと。それまでGNがデンマークの会社であることすら知らなかった。

拙宅の近く大波止にホテルベルビューがあるが、ホテルベルビューは当時の長崎に來られた外国人要人を宿泊してもらった洋式ホテルであったことも知った。デンマークでの濱田医師の活躍が楽しみである。